

令和4年10月28日

佐賀大学学長 殿

肥前セラミック研究センター長
矢田 光徳

令和3年度教員個人評価の集計・分析について報告します。

1. 個人評価の実施状況

(1) 対象教員数、個人評価実施者数、実施率

対象教員数：2名（准教授1名、助教1名）

個人評価実施者数：2名

実施率：100%

(2) 教員個人評価の実施概要（評価組織の構成、実施内容、方法など）

評価組織の構成

センターの個人評価の実施に係る評価組織は、肥前セラミック研究センター評価委員会とした。評価委員会の構成は以下の通りである。

- 1) センター長 1名（矢田光徳）
- 2) 副センター長 2名（有馬隆文、三木悦子）

実施内容及び方法

「佐賀大学肥前セラミック研究センターにおける教員の個人評価に関する実施基準」及び「肥前セラミック研究センター教員個人評価実施要項」に基づき、令和3年度の活動実績について、4つの領域（教育、研究、国際交流・社会貢献、組織運営）の個人評価を行った。また、研究部門や研究内容が異なる各教員の個性を生かす評価を行うために、予め各自が自主的に自己の職務の専門性・特殊性等を勘案して各領域における達成目標及び「重み」配分を設定して申告し、その申告に対して自己点検・評価を行った。

2. 評価領域別の集計・分析と自己点検評価

2名の教員の自己点検評価結果及び部局評価を以下の表1に示す。

表1 自己点検評価結果及び部局評価の一覧表

審査領域	重み ^{※1} (0-1)	達成率 (%)	自己評価 ^{※2} (1-5)	部局評価 ^{※2} (1-5)
教育	0.05-0.1	70 ^{※3}	4 ^{※3}	3-4
研究	0.6	70-100	4	4
国際交流・社会貢献	0.1-0.25	80-100	4	4
組織運営	0.1-0.2	70-95	3-4	3-4

※1 重みはすべての審査領域分を加えると1になるように設定している。

※2 自己評価及び部局評価は以下の5段階で行った。

5：特に優れている，4：優れている，3：おおむね良好，2：改善の余地がある，1：改善を要する

※3 教育に関する達成率と自己評価が空欄であった。

教員A,Bともに、肥前セラミック研究センターが「研究センター」であることを強く意識して、「研究」の重みを大きめの数値である「0.6」に設定していることが特徴である。また、教員A,Bともに、配属されている学生はおらず、また、任期も3年未満と短いために講義を担当しておらず、「教育」の重みは「0.05~0.1」と小さいことも特徴である。「国際交流・社会貢献」と「組織運営」の重みも「0.1~0.25」であり、これらの重みづけはおおむね妥当であると考えられる。

教員Aは、高い目標を具体的に掲げているために「達成率」を厳しめにつけている傾向がみられるが、評価委員会が客観的に見てそのような低い達成率というわけではなく、高いレベルで仕事しているためと判断している。自己評価と部局評価はよく一致している。教員Bの自己評価と部局評価はおおむね一致している。2名の教員の部局評価は3~4であり、いずれの項目でも着実に成果をあげている。

以上のことから、2名の教員ともに自らに期待される役割を正しく理解して責任感を持って業務にあたっていることがわかる。以下に、4つの審査領域（教育、研究、国際交流・社会貢献、組織運営）の評価の詳細を記す。

（1）教育の領域の評価

いずれの教員も、担当する講義はなく、直接指導する学生もいないが、教育に関して自らができることを考えて実行に移しており、その姿勢と実績は高く評価できる。

教員Aは、①デザインと科学・芸術文化の領域を横断したテーマのワークショップ開催、②デザイナーや他大学の研究者を招いた講演会・ワークショップの開催、③有田セラミック分野の学生に対するデザインに関するアドバイスを目標とし、いずれも目標を達成している。具体的には、ARITA×SOGETSU PROJECTの研究関係者に対するいけばなイベントと美術系の大学研究者を招聘した講演会を開催しいずれも好評であった。また、他研究部門の教員と連携したデザインに関する授業、学生の起業相談、陶磁器アイデアコンテストの事前審査等を実施している。重みは大きくない中で、また、新型コロナウイルス感染症問題で活動が制限されている中でも多岐にわたる精力的な活動が実施された。

教員Bは、研究グループに留学生や交換生等を受入れて講義と指導を行うことや留学生への英語講義協力を目標としていたが達成できなかった。これは、新型コロナウイルス感染症問題により留学生自体を大学として受け入れられなかったためである。次年度にむけて、海外の大学関係者と積極的に連絡を取って、受け入れるための準備を進めており、今後に期待したい。

（2）研究の領域の評価

いずれの教員も以下に記すように適切に研究を実施して、着実に優れた研究成果をあげるとともに、次年度以降につながる活動行っており、高く評価できる。

教員Aは、①研究の基盤となる肥前窯業圏のヒアリング、②窯業と他分野とのコラボレーショ

ンによる新規市場参入への取組みにおける協働プロセスの実践的研究、③有田町における新しい図書サービスの実践的研究を目標とし、目標を達成した。具体的には、①に関してはセンターの中でも飛びぬけた回数地域との協働活動を実施しており、②に関しては「ARITA×SOGETSU PROJECT」を実現させ、花器の開発のみならず、開発に関連したいけばな体験教室開催、研究発表展の開催、ギャラリートーク、研究活動のホームページ公開、2冊の報告書出版など精力的な活動を行い、高評価を得ている。③に関しては、リーフレットを発行し、有田町図書館の貸し出し数の増加にも貢献している。

教員 B は、陶磁器素材の開発に関し、①採択された科研費の進展と新規プロジェクトの申請、②原著論文3件と学会発表・講演3件、③地域との共同研究推進を目標とし、達成している。具体的には、獲得した科研費の研究は順調に進捗しており、また、3件のプロジェクトに関する予算申請を行い、そのうち2件は採択されて研究を実施している。②に関しては4報の論文発表と3件の学会発表と1件の招待講演を行っている。また、③については、佐賀県窯業技術センター及び民間企業1社と共同研究を行った。

(3) 国際交流・社会貢献の評価

いずれの教員も、それぞれの特長を活かした活動を十分に実施し、高く評価できる。

教員 A は、①佐賀大学教員とのコラボレーション活動、②技術相談への対応、③肥前窯業圏の人材交流を目標としており、目標を達成している。具体的には、①に関しては、芸術地域デザイン学部教員との2020年読売国際協力賞受賞記念ピンバッジ制作を行っている。②と③に関して、精力的に地域連携に基づく技術相談対応や人材交流活動等の社会貢献が行われており、教員 A の活動は肥前地区での当センターの認知度を大きく上げることに貢献している。

教員 B は、①景德镇陶瓷大学及び韓国窯業技術院との交流、②国際セミナー等の開催、③公開講座の開催、④有田での協働活動を目指しており、目標を達成している。具体的には、①と②に関しては、上述の機関との2回の国際セミナー開催やJSPS-NSFC 二国間交流事業の共同研究等を行った。③に関しては、芸術地域デザイン学部主催の公開講座で講師を務めた。④に関しては、佐賀県窯業技術センター及び民間企業1社と協働活動を実施した。特に、①と②の活動は、センターの国際交流活動の中核を担うものであったといえる。

(4) 組織運営の評価

いずれの教員も、自らに課せられた組織運営業務を誠実にこなし、センターの組織運営に大きく貢献した。また、出席が必要な各種会議にはきちんと出席するとともに、他のセンター教職員と協力して率先して種々の業務にあたっている。これらの姿勢と実績は高く評価できる。

教員 A は、①広報物を通じたセンター活動の窯業関係者への周知、②センター内の様々な情報を体系化と効率的な運用、③センター内の情報の共有を目標とし、目標を達成している。特に、①ではセンター全体の活動報告書の作成と配布において、中心的な役割を果たした。

教員 B は、①交換生留学生を受入れと交流、②センター主催の研究発表会・講演会等の開催への協力、SPACE-ARITA への協力、③ホームページの英語版を更新、④センターの運営と業務へ貢献を目標とした。①に関しては新型コロナウイルス感染症の問題で達成できなかったが、②～④に関しては目標を達成している。